

詩 集

桂 の 卷

河 井 醉 茗 選 著

中 澤 弘 光 裝 畫



桂  
の  
卷

河井醉茗選著





詩 集

桂 卷 の

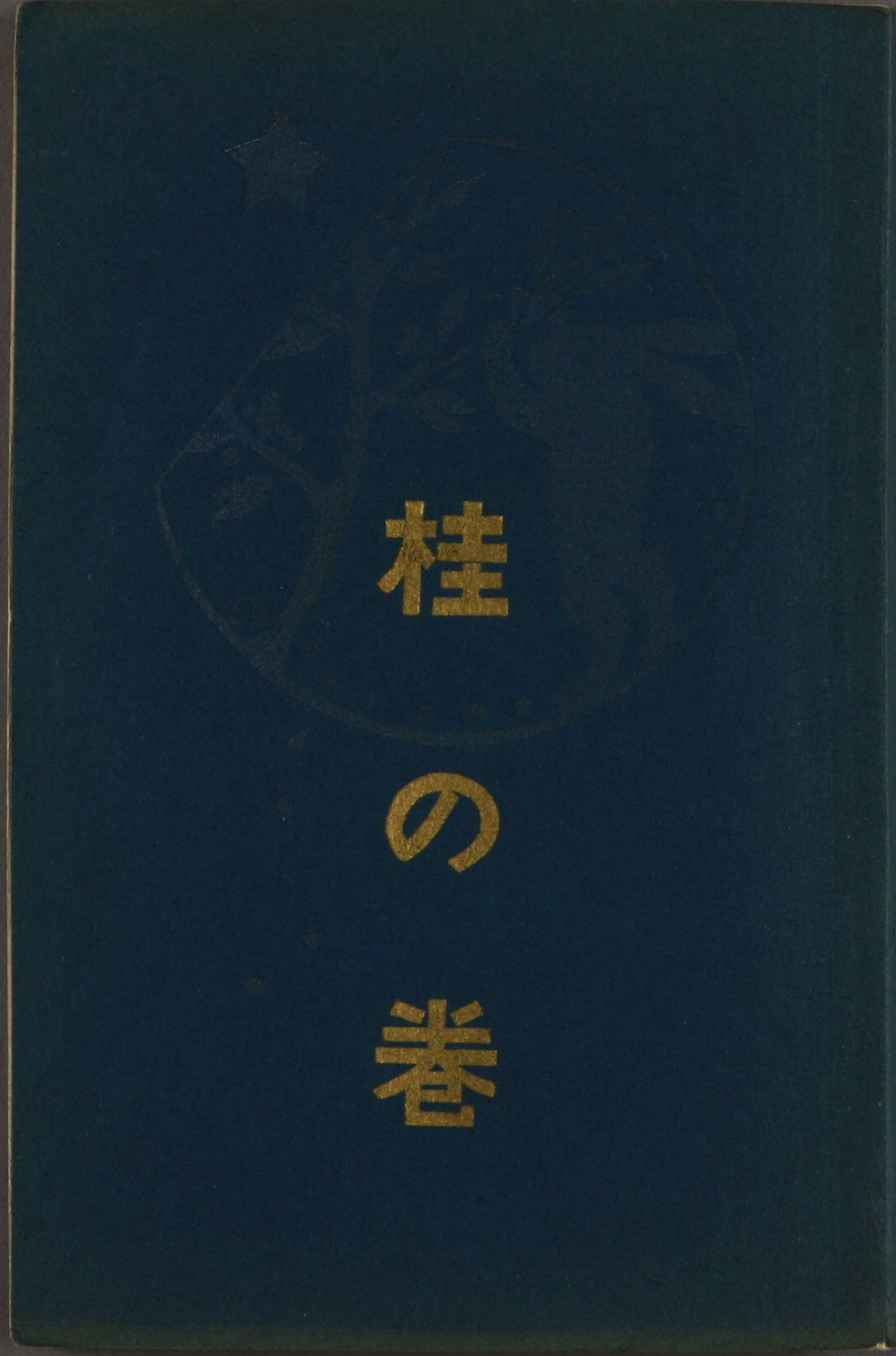
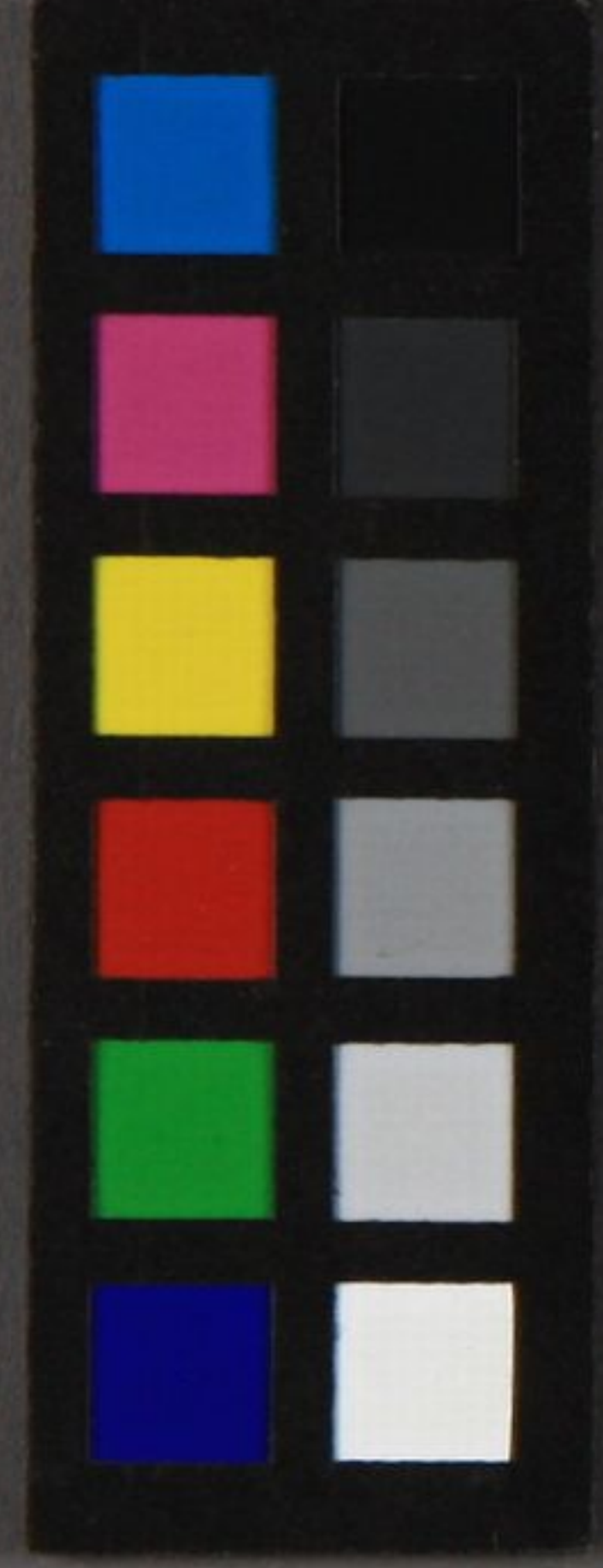
河 井 醉 茗 選 著

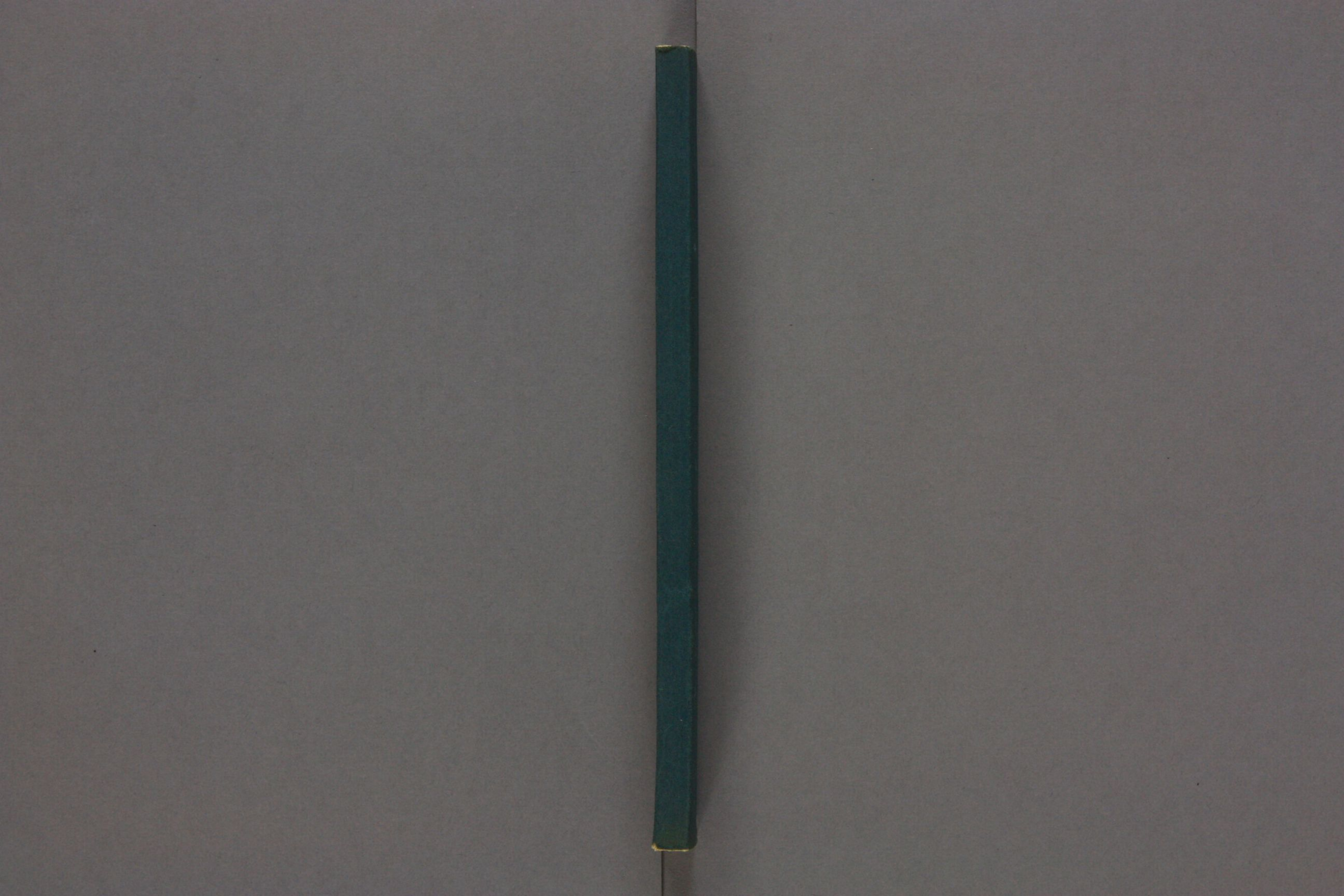
中 澤 弘 光 裝 畫

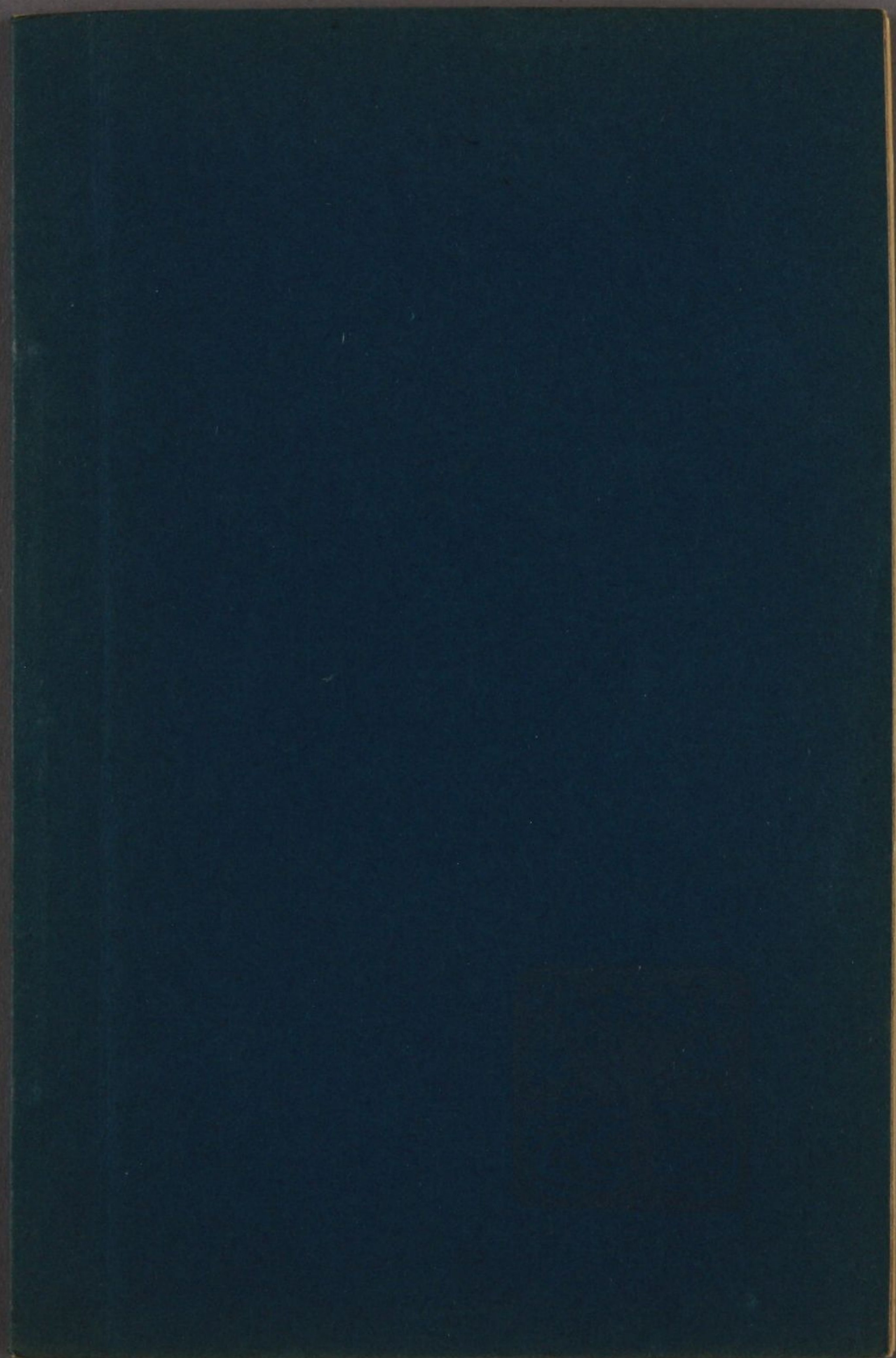
桂  
の  
卷

河井醉茗選著











桂の巻



偃蹇月中桂

結根依青天

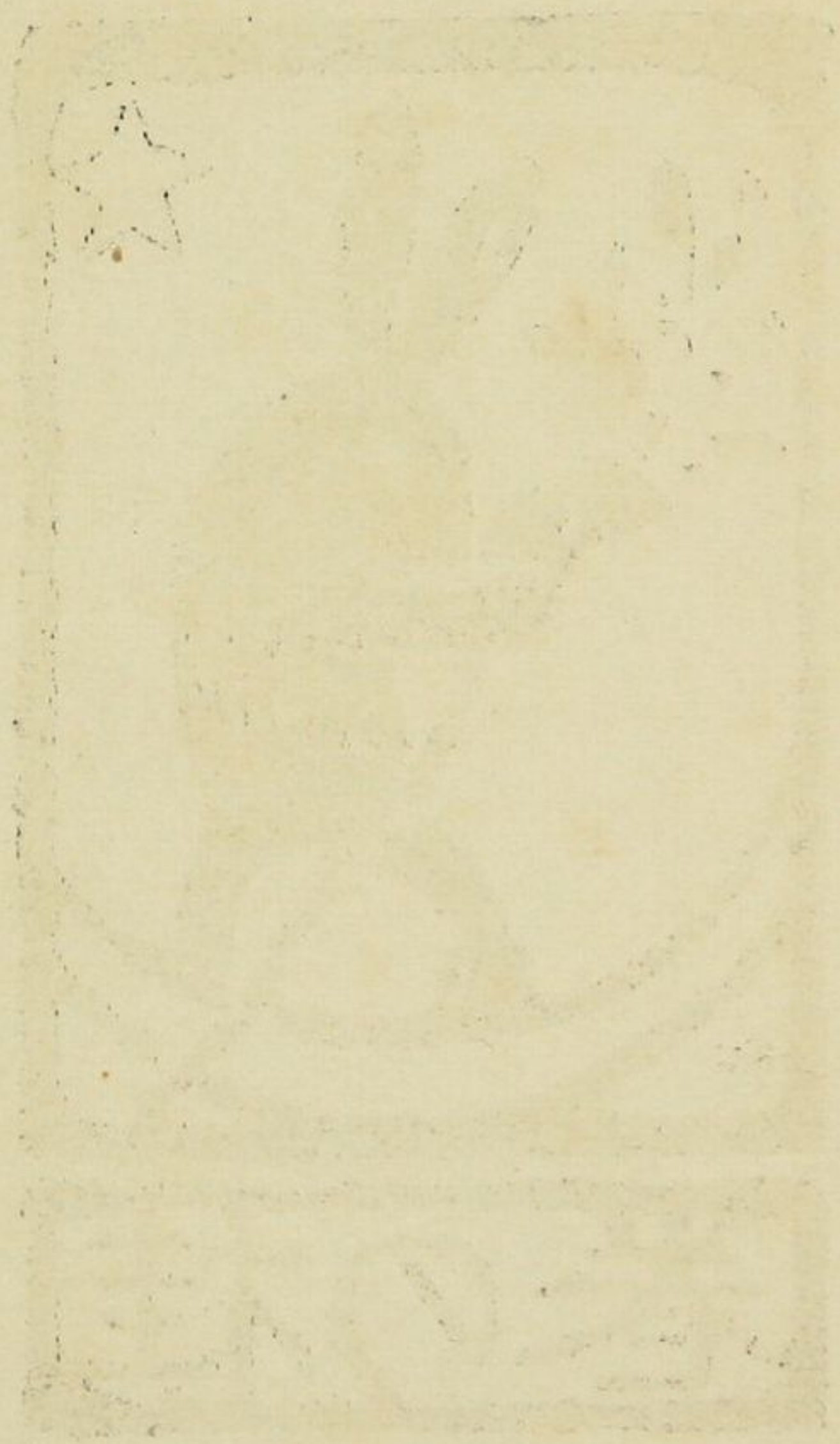
天風繞月起

吹子下人間

白  
樂  
天

目には見て手には取られぬ月中の  
桂のことき妹をいかにせん

秦  
陽  
原  
王



詩集「桂の巻」は「電報新聞」に發表されたる青年諸子の作中、更に優れたるものを一冊に纏めしなり。

載する處百二十五篇、短きは四句、長きも二三十句を出でず、雖、全體を通じて生氣、流るゝが如きものあり、萬斛の奇香、縹緲として春の雲の浮べるが如し。

「電報新聞」は新しく出でたる新聞なり、而かも此れだけの才人を詩に得たるに潜かに誇りとする處、文藝の前途や、光明赫々たり、諸子、幸ひに自ら重んぜよ。

四月二十三日

河井 醉茗





詩集「佳の巻」は「電報新聞」に發表されたる青年諸子の作中、更に徴れたるものを一冊に纏めしなり。

載する處百二十五篇、短きは四句、長きも二三十句を出でずと雖、全體を通じて生氣、流るゝが如きものあり、萬斛の奇香、繖飾として春の雲の浮べるが如し。

「電報新聞」は新しく出でたる新聞なり、而かも此れだけの才人を詩に得たるに當つて誇りとする處、文藝の前途や、光明赫々たり、諸子、幸ひに自ら重んぜよ。

四月二十三日

河井醉茗

目次

佐保姫

千家銀箭峯

佐保姫

時鳥

夕暮の巷を歩みて

河鹿

鐘撞男

春の美

紅葉

銀の星

田中静潮

壁に倚りて

桔梗

夢さめて

夕の市

行く年

八重雲

矢崎笛月

海の歌

虹の歌

偉なる墳墓

沙漠にして

草月夜

有本芳水

草月夜

秋の野

小鼓

稲の葉

筒井董坡

かゝる夕

冬翁來

落鮎

星月夜

繪の靈

岡田鯨洋

暮春

秋の森

桔梗

金鈴

シルレル百年祭

大和路

目次

佐保姫

佐保姫 時鳥 夕暮の巷を歩みて

河鹿 鐘撞男

春の美 紅葉

千家 銀箭峯

銀の星

壁に倚りて 桔梗 夢さめて 夕の市 行く年

田中 静潮

八重雲

海の歌 虹の歌 偉なる墳墓 沙漠にして

矢崎 笛月

草月夜

草月夜 秋の野 小鼓

有本 芳水

稲の葉

かゝる夕 冬翁來 落鮎 星月夜

筒井 董坡

繪の靈

暮春 秋の森 桔梗 金鈴 シルレル百年祭 大和路

岡田 鯨洋

灯影

指より指に 花の燭 灯影 春風怨 一月一日 小川の水

中尾根 虹劍

そらだき

舞殿 懸想文 見し人 年木樵 枯生

長谷川 春草

艶容

春宵 秋宵 春の歌 鈴岩

戸澤 菊韻

暗潮

六月の夕暮 雛の壇 戀の咒 石炭の歌

佐々木 幽浪

瑠璃鳥

花貝 花御堂 草葎

秋庭 露花

凌霄花

凌霄花 落葉

多久 銀花

灯影

指より指に 花の燭 灯影 春風怨 一月一日 小川の水

そらだき

長谷川春草

舞殿 懸想文 見し人 年木樵 枯生

艶容

戸澤菊韻

春宵 秋宵 春の歌 鈴岩

暗潮

佐々木幽浪

六月の夕暮 羅の壇 戀の咒 石炭の歌

瑠璃鳥

秋庭露花

花貝 花御堂 草葎

凌霄花

多久銀花

凌霄花 落葉

春の料

柴田筒浦

罪のかけ

手塚水哉

渚の秋

孔扇子

暗き蔭

矢萩碧雨

木實を拾ふ歌

杉本藻花

ごもしび

はつ女

秋の海

蓼村釣客

天滴

笠原球治

公孫樹

詩靈石

恐布

公寸影花

古 鼓

古鼓 こほろぎ 音楽堂

花 野

佛師 花野

冬 の 臺

冬の臺 山の精 鷓鴣 秋の海

みすゞ集

秋の鳥 神迎へ 養ふ蚕 朱甕 夕道遙

蜘蛛

蜘蛛 鬼瓦

夏 の 日

夏の白日 夏草 巖

牧 の 春 風

春の駒 秋海棠

海 棠 櫻

京を去る宵 落花 貝殻を拾ひて

南 風

新緑 歳のはて

暮 春

ゆく春 新茶

詩 聖

詩聖シルレル 天地終焉

海 の 幸

海の幸 駿馬 夏陸

春 の 料

罪 の かけ

渚 の 秋

暗 き 蔭

木 實 を 拾 ふ 歌

こ も し び

杉 山 胡 蝶

鹿 野 枯 峯

酒 井 溪 水

北 澤 久 治

山 田 碧 波

高 瀬 蔦 紅

月 の 山 守

小 藤 つ か さ

上 野 不 孤

龍 治 流 泉

木 村 湘 散

五 味 三 次 郎

柴 田 筒 浦

手 塚 水 哉

孔 扇 子

矢 萩 碧 雨

杉 本 藻 花

は つ 女

豊 客

春宵 秋宵 春の歌 鈴岩

暗 潮

六月の夕暮 雛の壇 戀の咒 石炭の歌

瑠璃鳥

花貝 花御堂 草葎

凌霄花

凌霄花 落葉

戸 澤 葉 龍

佐々木幽浪

秋庭露花

多久銀花

蟹

海士に 落日

秋の人

秋の人 夏姫

汐けふり

貝 櫻

新衣

かひこ 工女

潮流

毒草の實

鐘乳洞

夏の朝

豊年の歌

古鈴

臨終

ノーウ井ツク

傷ける友に

枯生

吾家の黄昏

秋の燕

年を惜む

夏の泉

天宮

赤羽彩美

中田緑葉

鳥井春外

川島文軒

鶴田龍波

青 人

松岡貞總

花輪みどり

淡霞子

江 風

細江釣士

茨城童子

緑 夢

吉田葭舟

飯田故郷

河村童子

三木亮

竹の堂守

楓葉生



春の料  
 罪のかけ  
 渚の秋  
 暗き蔭  
 木實を拾ふ歌  
 こもしび  
 秋の海  
 天滴  
 公孫樹  
 恐怖  
 椎の實  
 晝顔  
 北極星  
 みどり  
 天竺  
 秋の宮居  
 附録  
 新年河  
 ほころび  
 閃電

柴田 筒浦  
 手塚 水哉  
 孔 扇子  
 矢萩 碧雨  
 杉本 藻花  
 はつ 女  
 蓼村 釣客  
 笠原 球治  
 詩 靈石  
 松村 彩花  
 鈴木 五道  
 滑川 狭衣  
 田草 川生  
 鈴木 篝川  
 佐久間 桂花  
 三木 露風  
 河井 醉茗  
 同 人  
 同 人

桂の巻

佐保姫  
 佐保姫

蝶の片羽のちぎれより

河井 醉茗選  
 千家 銀箭峯

桂の巻

佐保姫

佐保姫

蝶の片羽のちぎれより  
黄金の雲はひらめきて  
春の御座はなりにけり

星の冠虹の帯  
月の帳臺日の車

河井醉茗選

千家銀箭峯

椎の實

晝顔

北極星

みどり

天竺

秋の宮居

附録

新年河

ほころび

閃電

木村

鈴木五道

滑川狭衣

田草川生

鈴木篝川

佐久間桂花

三木露風

河井醉茗

同人

同人

孔雀鳳凰袖垂れて  
夢より起し佐保姫の  
琴を抱いて花に入る

時鳥

若き樂師の美を守る  
輕き調の一節に  
のりて鳴き來よ時鳥  
呼吸の音静か百合の香の  
ながるゝ中に聲ありて  
そぞろ快樂の人に入る  
聲の動きに生命あり

生命の絃に興ふれて  
秘曲をいづる新らしき  
戀の空音の徒らに  
高き理想を繋ぐかな

夕暮の巷を歩みて

冷たき胸にたいよへる  
愁ひの如く人影は  
夕日に映ゆる白壁に  
瘦せし姿を刻み去る  
巷の角に佇立みて  
霧を透かして仰ぎ見る

塔の上なる大時計  
一針毎に消えて行く  
終りの光夕映に  
あゝ滅びゆく落日の  
都會の影も浮ぶ哉

河鹿

水にながるゝ蘭の香の  
山の大氣を吸ひなれて  
河鹿は息をうるほしぬ  
青き形の石に似て  
奇しき身振のおもしろく

彫師の冷えし掌に  
石にまぎれてのりにしが  
聲をふくみて重き哉

鐘撞男

鐘つく時を寝おびれて  
急ぎて走る小男が  
石につまづく冬木立  
木の葉の落つる響して  
大地は夢にをのゝかむ

春の美

舞殿の燭輝かに  
孔雀に似たり蝶に似たる  
美女三千の香に蒸され  
花はうづまく銀扇  
春の美風に動きけり

紅葉

金鼓山河にどろろきて  
笏返しや暮早き  
篝の焰地を捲いて  
萬葉の紅葉匂やかに  
輝き出たり山のはざまに

銀の星

壁に倚りて

金泥のうすき彩壁  
巖や彫りし裸形に  
すきもりて照らす白月  
扉によりて獨り黙す子  
あゝ美しく立てる裸形に  
思ひは太古人ならぬ秋

桔梗

田中静潮

深山夏樹の蔭にして  
踏まむとしたる桔梗花  
天宮より落ちし秋姫の  
まだ世がくるゝ姿にて  
夜毎に天宮を慕へども  
銀鈺の星さびしくて  
扉はとほに開かれず

夢さめて

深山夏野の花とりて  
夏姫沼にかくるとき  
刹那破れし晝の夢

まひるの窓に花賣女の  
紫陽花、薔薇、鹿子百合  
山なる野なる夏花の  
高きかをりに觸れしめよ

夕の市

さゝめく聲のやみはてし  
青物市場たどりけり  
靄たれこめし川並に  
紫淡き秋茄子の  
積みし車や秋にして  
夕の幸を運ばんと

再び市はどよめきて  
灯影は水にかゝりやきぬ

行く年

弦を離れし征矢のごと  
我世の年は行かんとす  
町ゆく人の歩早み  
時の流れの速かさ  
ふとみかへりの我姿  
罪の衣の裾ちかく  
永久にたゞれぬ影となりけり

八重雲

海の歌

ひと羽ばたくや流星の如  
九萬九千里天かける  
鵬の羽音に雲落ちて  
潮は響く永劫の聲  
世創まりて太虚の  
夢涵すこと三千年  
大海原よ寂寥を  
渺々として満すかな

矢崎 笛月

虹の歌

南珊瑚の島根より

北氷の海のはて

黄金反橋、さらめさや

天園劃る三千丈

壯なる哉高知らす

七つの彩よ榮の世よ

刹那神秘を仰がしむ

偉なる墳墓

北極近き雪の國

日光も遠き境にて  
低う凍りし天雲の  
輝く星を皆閉ぢぬ  
見よ見よ空の雪烟  
勢を盡して駈りけむ  
千軍引きし曉に  
偉なる墳墓築かれぬ

沙漠にして

王者が胸か常夏の  
熱砂火を噴く沙漠や  
愛宿らざる境なれば



縁見む世も遠いかな

運命の鞭に逐はれつゝ

沙漠の旅に果てむ子の

せめては一夜故郷の

美し野の花夢に見む

草月夜

草月夜

袖に露散る草月夜

桔梗かざして舞ひたれど

神のねん座を許されず

有本芳水

繪馬ぬけたりし白駒に

黒髪長き神女達と

白き装束を野に曳きて

供物積載せしづくと

堤七里を下るかな

秋の野

撫子亂る秋の野を

黄金の車れどろかに

揚羽の蝶を先立てゝ

戦さに勝ちし久米の子が

引しぼりたる大弓に

白羽の征矢を番ふれば  
銀鈴なりてむらさきの  
桔梗の花のひらくと  
こぼれて亂る大野原

小鼓

月かけ清き殿の庭  
白馬に乗りし公達が  
染分手綱ひかへつゝ  
さつと打つたる小鼓の  
一度は姫の夢にふれ  
二度打ちし時しもあれ

女房の夢もさめにたれ  
さりとは罪と小鼓に  
るよると衣を打ちかけぬ

稲の葉

かゝる夕

けふを一日のたゝかひに  
疲れの息吹喘ぎく  
落暎なごりの色を收め  
鱗雲ひく秋天や  
かゝる夕を失戀の

筒井 堇 坡

雀は西の海に入り  
めぐし斑入の蛤と  
姿や變へん一夜のうち

冬翁來

炭焼く煙朝を寒み  
梟木兔眉よせて  
樵の老樹にものがたる  
北なる峰を谿に下り  
粗造りなる旅木皮靴に  
霜柱碎きつゝ畔づたひ  
先づ木枯をさきだてゝ

冬の翁は來りけり

落鮎

伐りて流せる靈木の  
崇き香のみなぎりに  
太古ながらの氣をこめて  
七里繞る黙川や  
十月曇鮎肥えて  
濁り渦巻く戀の峽  
女夫が岩に肚すりて  
月夜靜かに落ちてゆく哉

星月夜

愛宕山風日枚嵐  
 揺落の風京をうち  
 人怖ぢしむる八衢の  
 灯さびしき秋風や  
 山の掟に乖きては  
 翅截られし天狗等が  
 口尖らしてがや〜と  
 鞍馬を下る星月夜かな

繪の靈

岡田鯨洋

暮春

三歳に成りし油繪を  
 春や都に送らんと  
 繪匠こもる燭の影  
 繪に靈入りし夕より  
 匠はものに狂ほしく  
 美し彩を水に投げ  
 花紅とけて翠とけて  
 あゝ此春も暮て行く哉

秋の森

十月、目路の遙けきを

小羊歸る南歐の

暮るゝ日あびしよるほひに

小さきながらも靈木の

しばゝゆるゝ梢より

秋鳥秋の氣を吸ふて

白雲に響けとうたふなる

聲の末より鳴る鐘に

一羽の鳥のあわたし

赤き實落して森に行く

桔梗

秋は樂しき歡樂や

池を圍りて桔梗道

紫姫のみちびきに

人は繪に入る幻の

花浮き出でゝ皆空に行く

金鈴

春大いなる野に立ちて

世の勢ひをうかへば

小さき胸にも理想あり

高く響かば雲の上

天女の樂か魔の樂か

あらず我振る金鈴に  
汚れを遠く走らせむ

シルレル百年祭

西のみ國の詩聖を祭る  
壇の上花環匂ふところ  
東の國に詩聖出ずやと  
人は説けるに理想を夢む  
人の子若き額の上に  
聖像靜かに笑みてぞ在す

大和路

薫る早緑淺緑

若葉さゆらぐ大和路の  
三輪を起き行く朝あけに  
千古の詩をうたひつぐ  
畝火耳無香具山や  
緑したゝる平和に  
家の遠きも忘らるゝ

灯影

指より指に

指より指に觸る血は  
花美しき香に燃えて

中尾根虹劍

みなぎり落る高潮の  
わりなく胸に返る哉  
有か無かの刺にだに  
身内の痛さ覺ゆるに  
響となりて潮となりて  
指より指に胸より胸に

花の燭

春の香封ず銀ふすま  
白桃落ちぬ夜は更けぬ  
花の燭火は消えて  
まどろみ在す雛の間や

蓮翹言はず桃語らず  
眉美くしき雛達  
わかつき深きつれぐに  
さゝやく戀もありぬべし

灯影

黒き夜の氣は物蔭より  
あかき灯影は草の間より  
日は西秩父の山の雲に  
御裳ながくも土に曳きて  
夜の光りは人に依りて  
照らし出てたる町の灯

静かに歩め宵のゆきよ  
安けき夢のふしどにまで

春風怨

手綱はしくば織つても進じよ  
色は紫染めても進じよ  
白のお馬に小荷鞍つけて  
何故に無言つて通らんす  
呼ぶにや耻かし呼ばねば濟まず  
梭が外れて手を走る

一月一日

永久より永久に繋るよ  
時間の緒の一節を  
歳と名づけて數へんに  
我は今朝より十七の  
一瞬きに新しき  
血の幾滴や胸に湧く

小川の水

小川の水はどくはせぬ  
人に引かれて物負ひて  
渡る雄馬の心なき  
やつれ姿を映しつゝ



小川の水はとくはせぬ  
森を廻りて野を越えて  
牧の女馬の唇に  
よき濕はひをはこびつゝ

そらだき

長谷川春草

舞 殿

落花、伶人の袖を打つて  
夜を彩る八重櫻  
樹陰の京の人みやびに  
春の夜更けたり能樂堂  
舞殿を渡る鐘は初更か

鼓亂るゝねぞろゝ

橋姫花より鬼とありて  
篝に隈取り青く照るよ

懸 想 文

春や十七眉ねびて  
笑美しくしき三の君  
さかし小冠者たはふれに  
懸想の文を参らする  
籠目を洩るゝ灯火に  
そらだき馨る宵おぼる  
文は袂に包まれて

紅梅月夜戀なりぬ

見し人

うら若の宮仕

若葉蔭見し人を

思ひ寝のうつらく

いつしかと秋立ちて

男郎花女郎花

濃染せし紅葉蔭

見し人はあらずして

年木樵

眠るに似たる白雲の

冬木に纏ふ深山に

翁は斧を肩にして

落葉の朝を年木樵る

樵し木の香に黄昏れて

白雲遠う流れ行く

枯生

遠き國より嫁に来て

村に馴れざる若妻の

早苗植つゝ五反歩に

姿消えにし物がたり

底無沼のひろく冬は浅瀬に水涸れて  
枯生となりし沼なれど  
里の子入るを恐たり

艶 容

戸 澤 菊 韻

春 宵

真紅のしどき丈に餘り  
死のうと結んだ胸と胸  
熱き情のゆきかひに  
櫻の淵も深うして  
月を浮べる女の波と

櫻こぼるゝ男の波と  
狂ひ調子や絃の音や  
はんに浮世のみじめさを  
撞けば別るゝ鐘の音  
可愛男と茜染  
下着の裙を踏しめて  
死んでも……ちよんと木が入れば  
緞子の彩の霞幕  
あれ常盤津や長唄や  
歌舞伎役者のかけ聲に  
京男 京女  
心中する身にはだされて

涙美くし春の宵哉

秋 宵

くづれかゝりし歌卷の

とぢ紐長う紅るに

秋の夜枕置きかへて

落ちし小櫛を姉に参らす

春の歌

琴を抱いて舞姫の

壁繪に入りし千年を

春は歸らずなりにしか

樂に添ふらし花の靈

壁繪自づと氣を吐いて

陽炎に春甦る

鈴 岩

昔天より鈴落ちて

鈴を伏せたる形せし

鳥は夜毎に鳴ると云ひ

舟寄するさへかなはずと

薩摩の海に昔より

鈴岩どころ傳ふるが

こは愚かしと嘲笑ふ

國の漁夫の舟装ひ  
月の光に銀を溶く  
島に或る夜を眠りしが  
鈴振る音を聞きながら  
眠りはさめず船に歸らず

暗 潮

佐々木幽浪

六月の夕暮

炎の宮の棟落ちて  
夕暮れかゝる六月の  
彩雲西の空に榮え  
麥生黄色に勾配の

丘は斜めに雲を劃れる

雛の壇

雛は燦爛うつくしう  
桃の灯影にくつろぎて  
蒔繪車の銀の牛  
酔たる童幼うて  
姫戯ふる壇の上  
青貝摺の玉の琴  
響きぬ雛の歌のせて

戀の咒

燃ゆるを止めよ白蠟の  
煙に絶えし手弱女が  
念力籠めし鉦の韻は  
煙にもつれて扉を洩れて  
鷗の背より沖の海へ  
消ゆとは見ゆれ憧憬の  
妄執うづまく海姫の  
船覆さんと常夕を  
髪もをどろの狂相や  
潮暗さにあらはるゝ

石炭の歌

緑榮ある土の下  
春野千年に秘めたれば  
胡蝶と云はず花と云はず  
此世あこがれ火に悶え  
火山黙せるを怒りては  
暗さに下る石炭掘の  
鍬の響によみがへり  
夏の王子が御料の  
鐵蹄溶かすと竈に入る

瑠 璃 鳥

花 貝

秋 庭 露 花

礫草匂ふ夕濱の  
 巖が根銀の沙にして  
 姿あえかの花小貝  
 優さしく秘めし何の彩  
 沈む日神が爛爛の  
 光榮といめたる雲の裳  
 融けて流れて龍宮を  
 めぐり來しかや夕潮の  
 囁き若き靈歌に  
 懐かしみよる蟹の子が  
 想燃えつる胸の扉を  
 洩れし焰の紅か

罪の影なきやさ戀の  
 精やこもれる二片を  
 天の宮居にさゝげなば  
 かいやさいいでむ女夫星ども

花御堂

よるに冷たき精靈の  
 闇の扉を照らしては  
 生命の道を啓示したる  
 聖燭にはふ三千年  
 教法の光明永劫の  
 讃歌となへて椰子の蔭

聖者天降りしおもかけの  
 御像おろがむ衣手に  
 天の濃漿とうまし香の  
 甘露をそゞぐ洗禮や  
 美妙を祝ぎて春花の  
 紅紫の彩を環にぬきて  
 こゝにさゞぐる莊嚴の  
 わゝ崇高きかな花御堂  
 草 莓  
 燃ゆる夏の日青草に  
 こぼれて泌みし露の香や

愛の眞珠と結びては  
 紅美まし莓の實  
 唇紅ませ情熱の  
 戀はひとしき珠と生れむ

凌 宵 花

多 久 銀 花

凌 宵 花

百合掘る人の語らひに  
 恐怖を抱く氷室山  
 森林深く夏寒し  
 竹の皮ちる曇り日に  
 生木伐るとて若人が



力りきあまれる斧おのふりて  
梢しほを高く仰あやぎしが  
凌宵花りょうせうか咲さき亂みだれ  
胸むねにしみくる匂におひあり

落おち葉え

恐おそ怖おそありてふ神木しんぼくに  
恐おそれず斧おのをうち振ふるふ  
木こ挽ひの衣きぬの紫むらさに  
銀杏ぎんぎょう黄葉おうようの亂みだれちる

古ふる鼓つづみ

杉  
山  
胡  
蝶

古ふる鼓つづみ

昔戀むかしこひしや此こゝの古鼓ふるつづみ  
小雨こよめそぼふる卵たまごの花はな小垣こがき  
優やさしうもるゝ音ねにあこがれて  
たゝすむ傘かさに花はなほろほると  
夜よは更あけたり雨時鳥あめときどり  
昔戀むかしこひしや此こゝの古鼓ふるつづみ

こほろぎ

月夜つきよあかりのそゝる寒さむ  
機織はたおりやめはこほろぎが

稻を刈り入れ月かけたなら  
寒さが来るから肩させ裙させ

音樂堂

夏空たかき月影は  
市民の上に照らしつゝ  
樂堂遠く取り圍み  
耳傾くる西の曲  
ワルスの舞か人ありて  
樹立がくれに舞ひ出でよ

花野

鹿野 枯峯

佛師

地に落たる椰子の實を  
佛に刻み市に賣る  
佛師は貧に瘦たれど  
御像の相端然たり

花野

淺間が長く裙曳きて  
高原をなす北佐久や  
夏草交り秋草の  
花爛々と開きけり

千曲の川の上すべる  
風にゆられて香を吐けば  
科野の山に雲かゝる

冬の臺

酒井溪水

冬の臺

日は殘菊に沈みはて  
風森にれさまるや  
空も凍るか枯野原  
夜の影白く覆はれぬ  
銀築く月宮の  
光り冷たく地に曳けば

曉霜と結ばれて  
冬の臺は成にけり

山の精

千年を経ぬる松が根に  
薬掘らむと山がつの  
夏山深く入りにしが  
終に歸らずなりにけり  
秋神さびし靈山に  
穢れしものを入れずとや  
山祇朝の氣を吐けば  
千谷百谷狭霧吹く

鷓鴣

麥を蒔く娘のよき歌に  
土龍は穴を出んとし  
強き光りにをのゝきて  
脆くも草にたふれたり  
魂朝霜の氣に觸れて  
甦りしか鷓鴣  
人目をしのぶ身の振に  
少女が垣を鳴きてめぐれる

秋の海

黒潮よする三千里  
色鳥わたる四五百羽  
ろらや水なる秋の海の  
玳瑁ひるゝ南より  
眞珠つみのせゆらくと  
白帆ゆたかに歸るかな

みすゞ集

北澤久治

秋の鳥

梢はなるゝ椎の實の  
落ちて聲ある小山路や  
紅き實あさる鶺鴒の

秋感興のうたの音に  
真葛掘る子の籠さげて  
五様の寶を持て來よと  
頬赤鳥、連雀、山雀の  
うたやろゝるに真似て行く

神迎へ

花魁へる小春日を  
大國主の神召して  
出雲の國の御社の  
靈廟神座に神集ふ  
五百千萬の國神や

出雲神樂の徒然を

奇稻田姫がまがつびの  
興ある長さ夜語に  
三旬早く日はたちて  
神祠守る宮人の  
神を迎への樂の音は  
明け行く森に響さけり

養ふ蠶

四たび五たび刻む葉や  
棚のかすく籠のかす  
厨の業もかへりみる

未だ家なれぬ新妻の  
しばし桑摘む手を止め  
唇すべる鄙うたや  
夫は戦地で妾は養蠶  
共に苦勞のつくしあひ  
消えゆく如き聲のあや  
人や聞かむと耻らひぬ

朱 甕

時間流るゝ幾年を  
畠にうもれし小さき甕  
今日野の賤にあばかれて

模様やをかしと濯がれぬ  
白日流るゝ何の色  
甕は碎けて朱は溶けて  
二日二夜をくれなるの  
潮となりてみなぎりぬ

夕 趙 遙

煩悶悲哀戦ひに  
倦じはてたる大衆の  
靈を高きに救はんと  
微妙の鐘は響けども  
地響ある八巻や

夕道遙の興さめて  
一人黙思に耽る時  
再び鐘は高鳴りぬ

蜘蛛

蜘蛛

落葉朽葉に埋もれて  
扉朽ちにし草堂の  
静けき夕忙しげに  
さかし小蜘蛛の殿造り  
今宵小さき戀なりて  
去年の野分に垣間見し

山田碧波

足高姫が御輿入れ  
父君來ませ母來ませ  
うまし御饗は野の花の  
蜜に酔ひたる黄蝶  
毒は失せたる山蜂の  
肥えたる肉も候ふぞ

鬼瓦

さらば如何なる名匠が  
苦心に汝は創されけむ  
天承鼻や縮毛や  
額より頬へ渡鳥の

汚穢したゝかかけられて  
擧めし眉のをかしさよ  
賢し小鳥たはむれに  
野邊の小草を啄みて  
汝が額髪に挿しゝより  
いや生ひ茂る花盛り

夏の日の

高瀬 葛紅

夏の白日

夏の白日をたゞ一人  
大野になやむ若旅人  
偶々蛇のいと安う

合歡の葉蔭に眠る見て  
歩みつまづく焼巖の  
巖根の草に身を埋む

夏の草

小野の未なる夏草は  
晝の帝の勢ひに  
色よき露も乾きしが  
髪の高き夕姫の  
歸り來るとうすものゝ  
優しさばきによみがへるかな



巖

満ち来る潮の大波や  
天の紫星を捲き沈め  
巖呑まんず轟々と  
押し寄せ来る凄まじさ  
されど手負ひの大獅子に  
動せぬ猛者のうれの如  
太古のまゝの姿して  
巖は波間に聳え立つ

牧の春風

月の山守

春の駒

美し光草甘き  
那須の霞の氣に酔ひて  
駒たけのびぬすく〜と  
蹄あぐれば鐵の  
楯をも蹴つて破るべく  
通力得たる眼ざしに  
千里の雲を飛びゆかんと  
朝を足搖の牧の春風

秋海棠

秋風揺れて幾ふさの  
秋海棠の露零ちぬ  
亡き妹が幻の  
古き井桁に凭れたり  
男手の無き水灌ぎ  
莖紅るのうすき日に  
花の一重の夕寒み  
磨水少し流しやる哉

海棠櫻

京を去る宵

伊勢の繪巻に枕して

小藤つかさ

花の香窓にうたゝねの  
夢は今宵の一夜ぎり  
捨てゆく興と辻占を  
さぐれは何ぞ紅摺の  
花をきらふて雁は行く  
待つと誰やら書かれたる  
雨の夜頃を旅に寝る

落花

海棠櫻春の灯や  
朧繪ぶすま薫すると  
まぎれし夢の人追ひて

うつゝ琴柱に袖ふれし  
京緋鹿の子の花吹雪  
かへせは蝶が戀の子の  
魂にむつるゝ薄闇の  
こぼれて消ゆる花の數

貝殻を拾ひて

島は夢なる朝の月  
さかしはさみに藻をかづく  
さいれ枕の蟹の宿  
梅の花貝櫻貝  
つぎぬ龍宮の春の彩

朝の人の夢守ると  
別れの唄を貝裏に  
伏せて合せてやさ額に  
潮風の荒きをいとほまし

南風

上野不孤

新緑

南風五月地に吹けば  
地に生ふるもの草も木も  
長き流れもわか〜と  
もとの緑に返るなり  
童子三千野に出でゝ

寂寂かりしな冬枯を  
忘れし如く新緑の  
光、樂しく歌ふかな

歳のはて

流轉は天の則なれば  
光を載せて夜を載せて  
わゝ永劫に止らざる  
終りを誰か豫想んや  
今日、一歳の果に來て  
星は隠れて雲覆ふ  
胸に疑惑と恐怖あり

暮 春

ゆく春

わかね、むらさき、艶麗の  
彩衣脱ぎて天つ少女  
緑の衣身にまどひ  
くれゆく春の名残をば  
少さき胸に惜みつゝ  
南の風の吹くなべに  
行かんとしては首垂るゝ

新茶

龍治流泉

五月雨呼吸も濕らん  
に  
京ある伯母の訪づれて  
戯言多き夜語り  
銘打ちたるや宇治の土産  
新茶の色濃く出で  
香り溢るゝ陶器に  
賓客興は高さかな

詩 聖

木  
村  
湘  
散

詩聖シルレル

詩聖高き去りてより  
時間流れて百年を

東に詩は甦り  
こゝに紀念の祭の日  
詩聖の跡にあこがるゝ  
花束清く飾られし  
壇に上りて詩誦せば  
唇詩の靈を得て  
響自づとわなゝきの  
詩神天より來るかな

天地終焉

有りと有らゆる秘めごとの  
浅ましいかな人の手に

發き盡くされ天地の  
希望も愛も皆失せて  
渾沌たらん時はやく  
神のさばきの斧をもて  
加へられたる一撃に  
世は真洞とぞなりはてむ

海の幸

五味三次郎

海の幸

海には海のはたつ物  
山には山の毛の物を  
神は創めに形して

山と海とへ分給へり  
満干はわれど沙先に  
漂ひ浮ぶ海草の  
海の香をもたらしして  
真珠白珠底に満らむ

駿馬

奥の野馬も召さるゝに  
二丈の素鎗ひツさげて  
吾祖の乗りし鹿毛の駒  
丈七尺に餘れりてふ  
鎮守の宮の繪馬堂に

捧げし額は年経るも  
精悍の氣の溢れ出で  
牽かば躍らむ嘶かむ

夏の蔭

龍駕に召して春姫が  
雲に入りたる朝明や  
雨は静かに野に下る  
新樹嫩葉の淺緑  
うねれる川の水も青く  
鳥初夏の歌多く  
羊の胸毛風輕し

蟹に

赤羽彩美

海士に

かすみ渡れる大洋の  
小さき波にゆられく  
漁り小舟櫓を下す  
急げ海士の子浦島が  
見しと傳ふる龍宮も  
汝が行く方に遠からじ

落日

雲の彼方に落る日の

靈光の矢を後に射て  
薄紅に、オレンジに  
今夕焼の盛りなり  
萬象やがて眠るべく  
今日の名残の一榮え  
消なんとする物皆の  
美しく、誰か仰がざる

秋の人

秋の人

もの思ふらしき秋の人  
うなだれがちの姫のせし

中田 綠葉

一葉の舟は夢のごと  
流のまゝに下りしが  
葦の枯葉に日はさして  
霧になりゆく夕河

夏の 姫

薫風軽く袖に入り  
夕空、水に似たる時  
合歡の葉蔭に露垂りて  
夏姫うよと來るらし

汐けふり

鳥井 春外



貝かひ

殻かより脱ぬけて貝かひの身みの  
 貝かひは何いづ處こに去さりにしか  
 海うみに小ちひさき朝あ夕ゆふを  
 巢すどもりけりな汝なが胸むねに  
 優やさしの戀こひや秘ひめたると  
 人ひとの子こ、若わかき掌たなこに  
 色いろよき貝かひを載のせて見みるかな

櫻さくら

曾かつて一こせ歳やま山かつの

新しん衣い

斧きりを振ふるふて臨のぞみしが  
 さはれ櫻さくらの老ろう木ぼくに  
 靈れいや籠こもると悸ぞきに  
 心こころも空くらに止とりぬ  
 彌や生ひ花はな咲さく此この朝あ明け  
 眼め覺きひる許より瓔えい珞らくの  
 櫻さくらの梢こし仰あぎつゝ  
 袖そでは再ふたび悸ぞきぬ

かひこ

養やしなふ蠶かひこ幸さいちありて

川 島 文 軒

皆すこやかに育ちける  
日毎にわたふ桑の葉を  
食むに疲れず人の手に  
彼は生命を任せつゝ  
眞白き繭の巢をつくる

工女

晝も小暗き工場に  
若き女の幾群は  
夜より朝まで働さぬ  
夏を海邊に避くるてふ  
美しき人のうすものも

斯る夕に織られつゝ

潮流

鶴田龍波

嫉妬か浪の渦捲きて  
舟傾けし其夜より  
千ヶ崎沖に永久の  
高き潮は流れけり  
伊豆に漕ぎゆく大島の  
戀の小舟は影あけど  
聞け遠磯に歌ふ聲  
潮の流れをとめてみよ

自註大島の俗謡に「男達なら千ヶ崎沖の潮の流れをとめて見よ」

毒草の實

怪鳥の嘴に觸れしより  
草の實の赤きこぼれけり  
靈鳥あかず人氣せず  
只いたづらに毒草の  
實を結びしがこぼれけり

青

人

鐘乳洞

導く人はあれたれど  
従ふまゝに冷氣みち  
鐘乳洞の洞の奥

松

岡

貞

總

脚の清水のこぼるかき  
ふる松火の光うすく  
おぼろにうつる人の影  
汚れの胸の洗はれて  
我つく呼吸のかすかにひやく

夏の朝

花輪みどり

眠を脱けし靈鳥が  
羽ばたき明くる曉の  
夢をこめたる靄晴れて  
天地緑に醒覺めたり  
草葉のうよぎ地の濕り

蹠涼しき朝露に  
人うら若き感興の  
野の労働をおもふかき

豊年の歌

人は裾野に古たれど  
藁家の歌を聞かしき  
今年や辰歳穂に穂が咲いて  
早稲で七石中稲で九石  
刈た晩稲は車に積んで  
積んだ車が一噸  
聲さへ節さへ面白の

淡霞子

歳の實を神に謝すらむ

古鈴

世紀三たびを経たるあり  
黄金自然の輝きを  
此處ガンジスの岸にして  
砂に埋るゝ一古鈴  
許さぬ戀に首領の媳  
隠れて獨り訪ひし罪  
結ひつけられし守鈴の  
岸に生命を止めたり

江風

臨終

天の扉を啓くべき  
一つの鍵は探り得て  
今ぞ我手に觸たりと  
微笑あから眼を閉る  
友の臨終の静ある哉

ノーウ井ツク

浪の荒きを蹴開いて  
對馬の北に奔らむか  
落潮暗き色丹に

細江釣士

茨城童子

霧を冒して迫らむか  
半折れたる帆柱に  
残るは旗の破しのみ  
際なき海に何時迄か  
瘡を包みて泛ぶらむ  
天飛鳥の影ならで  
艦に伴なう友も無し  
八雲むらがる沖合に  
今日も夕日の落れども

傷ける友に

三千年を傳へたる

緑

夢

胸の奥なる清き血や  
其流るゝを眼にも見て  
擔架に乗りて歸る君  
友よ祝せよ國の神  
大なる手に饗け給ひ  
其血は頓て子孫等が  
歩まん路の花とせん

枯 生

吉 田 霞 舟

蓬枯生よ汝はろも  
春をとこしへ枯れにし  
我もタイムに葬られ

冷き夢に眠る子ぞ  
地に凍りたる草にすら  
香ありや花ありや  
枯生に立ちて血潮のゆらぐ

吾家の黄昏

飯 田 故 郷

弔らひ來にし村人の  
戦争語りも打絶えて  
夕日も今ぞ入がたの  
主なき宿の淋しさよ  
幸くと祈し人は今日  
歸り來まして玉床に

悲しき我家譽の我家  
柩にいざや燭を灯さん

秋の燕

一夜天なる秋姫が  
露置く草に下りしより  
軒に巢くふ燕  
さびしき曲に驚きて  
古巢の子等をよび集め  
南洋の雲に羽打つべく  
朝な夕なに舞を教ふる

河村童子

年を惜む

榛の梢にかゝりたる  
光も弱き夕ばえの  
幕かゝげて年は今  
無窮の國に行んとす  
わが青春の夢一鞠  
自然の従者と生出で  
年の轍のあと追ひて  
吾立つ邊夜風淋しき

夏の泉

三木亮

竹の堂守

優しき森の姫神が  
恵の露の滴りか  
自づと苔の香を罩て  
玉ほとばしる岩清水  
我今溪に下り立ちて  
清き眞清水そと吸ば  
冷たき神の靈觸れて  
胸にすゝしく覺けり

天宮

紺青の帳深うして  
ながめ許さぬ天宮や

楓葉生

自然の神のめでこゝろ  
秋労働の野の子等に  
尊き幸を受けよとて  
秘宮扉をひらく時  
野は玉しきの靈光に  
山ひらさきに金湧いて  
雲七彩の矢を放つ

春の料

簾をわけて思ふさま  
桃の香入るゝぬるき風  
梭の音ゆるう賤機の

柴田筒浦



佐保姫春の料や召す  
おぼろ夜月の影のせて  
織られて行くよ綾よ錦よ

罪のかけ

白雲の迷宮を、もれ来る  
譜につれて、七つ罪、頭をもたげ  
うごめきて年は行く、行く年の  
鐘鳴りぬ、罪のかけ、のせて去れ

渚の秋

夕月の渚に

手塚水哉

紅扇子

南洋の島より  
椰子の葉を捲き込め  
珠宮の戀語り  
詩の郷にみつぐと  
秋風に舞ひつつ  
初汐はさし満ちぬ  
崖に咲く白萩  
小唄して入りくる  
とま船の帆うちに  
零れるは砂地を  
花草の揺さ  
女男の波さゝめさ

紅蟹の興を呼ぶ

暗き陰

火桶に倚りて姉妹が  
夜長の興の物がたり  
笑ひ聲さへ罪なげに  
可否事のふと外れて  
物問はれたる中の姉  
伏目勝にて燈火の  
暗き陰より對へかねたる

木實を拾ふ歌

矢萩 碧雨

杉本 藻花

坊やが生れし其春の  
裏の小山の二葉の芽  
今は緑もこまやかに  
七ツと云へば里の子も  
物わきまふる秋の暮  
木蔭に拾ふ丈も伸び  
枝も伸びりすくくと

ともしび

万象ねむる冬の夜半  
凍れる月を外にして  
灯かゝげ書を読む

はつ女

萬籟聲をひそめたる  
人なき折を耀きて  
燃る燈火に神秘あり

秋の海

蓼村釣客

舷わらふ船の藻に  
霧は落ちけり白き波  
南の空に消えゆきて  
鵜舳に立つ秋晴よ  
浪にまかせば龍神の  
高ふむ島に着きぬべう  
しろがね映る海のはて

たゞよふ影を透かしみる哉

天の滴

笠原球治

三粒を海に振り撒かば  
地を潤しの現ありと  
遠き國より雨乞の  
祈禱捧げて汲む神泉や  
洲羽の宮居の靈ありて  
甕に滴る天滴は  
汚穢の人をはいかるこ  
樟の扉をかたくして  
暗きに靈の秘らるゝ

公孫樹

詩 靈 石

うゝるなる哉  
 秋の丘の  
 遠き小草にあらはれて  
 影と形とよるが如  
 人相逢ふてうなだれて  
 消ゆるどもなく去にし  
 丘秋冷を身に覚え  
 公孫樹は瘦ぬ落る葉は  
 まが鳥の如身をなして  
 人の歩は重かりし

金色流す夕哉

恐怖

松村彩花

若宮に御神燈かゝぐ  
 靈香の青葉のゆらぎ  
 はふり子のみてくら持ちて  
 仰ぎ見る森の常暗  
 心弱の恐怖や  
 頭の冠地に落して  
 夜風が返す裳裙はらゝと  
 ひた走り石階下る

椎の實

權太は礫上手にて  
打てば落來る椎の實を  
欣ばしげに主従が  
旅の小笠に拾ふかな  
其かあらぬか旅包  
心かろげに取上げて  
權太は行どはらくと  
後にこぼるゝ椎實よ

晝

顔

鈴木五通

滑川狭衣

されど翌日の眞晝咲く  
花よ薄紅むらさきの  
色きよらかに野に榮えむ  
こや美はしき野の花よ  
よべ萎れにし彼の花の  
甦れるにあらざるか

北極星

流轉は天の則なれど  
神の秘めたる北極の  
座を我はまもるため  
永劫揺かじと瞬ける

田草川生

北極星の光輝かな

み どり

鈴木 箒 川

若葉の露の雫して  
里の小川は緑なり  
神はまばゆき御手より  
緑を溶いて流しける

天 竺

佐久間 桂花

エロラの山に雲湧いて  
七寶諸樹に風立てば  
十かさねたる瓔珞の

奇しき響も絶えはてぬ

われは倭の弱法師

光無量の釋迦牟尼が

ひそかにこめし靈妙の

秘密の鑰を探らんに

衰へけりな錫杖を

都大路に響かせて

泥土にまじれる御佛の

寂し光りを見たりけり

齡流れて今こゝに

聖者の舍利を手にすれば

朽ちて影なき塔の

滅亡の國は遠く暮れたり

秋の宮居

三木露風

天の宮居のおばしまに  
星を愁ふる秋姫が  
袖の下より風立ちて  
美し秋となりにけり  
姫のめぐしこ金鐘兒は  
樂座の許に集ひ來て  
桔梗の花のひらさきに  
優しき歌や載せもせむ

附録

新年河

醉茗

それ泰山は土壤を譲らず故に能く其高きを成す河海は細流を  
厭はず故に能く其深きを成すとかや百川朝に注げども大海  
原のあをくと溢れすひかず満潮の暖かにころ廻るなれ  
水も若やく黍明を花塗舟のゆたくと龍神波に現れて年  
のよごとを舉げ玉ふ奔馬の勢滔滔と大河は天を浸さん  
づ後に隠るゝ野の小川せゝらぐ音もひろやかに萬水こゝ  
に集らむ

坂東太郎「山遠うして平なる 關八州の廣野原 草も短き毛の國に  
育ちは荒き大根や 小利根を合す波の上 歌は潮來のしほら  
しく 白帆の蔭にかくればや

筑紫二郎「不知火燃ゆる海に沿ふ 筑紫は國も暖かに 紫の花紅の

花 桔梗とひらき蘭と咲く 草木の根にも潤澤の 水の生命は

盡きざらむ 天つ日向ふ高千穂の 神みそなはず畏さに 浪は

静かに翻るかな 像に彫らばわけもなく 面の色は常な

四國三郎「河の姿を香木の 像に彫らばわけもなく 面の色は常な

らむ 八月天の怒りにも 水は溢れず穩に 藍の葉つくる野に

流る 紀伊女「葦邊を守る玉津島 姫なる神の鎮まりて ろうたき山のた

ゝすまる 河原の石は白うして 柑子林は黄に熟みぬ こゝ南の

はてにして 展し絹繪のゆるやかに 裾曳く山は海に入り 淺

瀬の水は潮となる 浪の境や和歌の浦 心焦て矢の如く 進に進む

富士の早太 「おほらかならぬ性なれば 心焦て矢の如く 進に進む

兩岸の 花も碎けむ源の 雲の上より溶け落つる 雪や消ゆる

に早うして 天女が掬ふ春の水 甕に封すれば冷かなり

天龍上人「大河の水、一波動いて千波したかふ 風相水相離れずと雖

も水は動くにあらず 風去れば即ち止む 心は水の如し 萬有

は風の如し 而かも共に之れ無常にして夢の如く、幻の如く、尋香

城の如きを誰か知らむ 穴に棲むてふ寒國の 水脈未だ亂るれ

石狩男「月の輪白き荒熊の 穴に棲むてふ寒國の 水脈未だ亂るれ

と 菜につちかへよ、牧草に 羊を放て楡の蔭 働く土地の狭から

ば 渡ればはてなき北の海 雪消の頃をアイヌ等は 蟻窟吹いて



しるべせむ

信濃四郎

「千山ひさるる不二淺間 雲のろびらに顧みて 北斗に向ふ

夕空の 越路は雪に埋れて 春はいつより遅からむ

最上五郎

「野馬の眼よりかげらふの 春は耀く牧を出で 行けども

人と親まで 空しく落つる荒海に 如何なる土産をもたらさむ

加茂の朝臣

「中古の榮え大内裏 朱雀大路は狭まりて 畦と消えゆく

世の跡は 水の面に映り行け 伽藍の軒は高けれど 人は懐古に

仰ぐのみ 花を頂く大原女の 橋越ゆる日も稀にして 櫻かざ

せし平安の あゝ千年は夢なれや

吉野姫

「舟並めて朝河渡り 舟競ひ夕河渡る 大宮はこゝといへ

ども 古の人に逢はめや 大和には山河あれど 大君の幸をほぎ

て 歌ひつゝ仕へまつりし 河はあらめや

木曾少女

「月に衣擣つ荒たへの麻の 衣を身に纏ふ 小木曾少女に

戀も候 尾張に絞る美濃の機 春衣夏衣を染上る 水の雫や清か

らむ

龍神

「わら面白の石乗やな なかなか興は盡きざれど 天の河よ

り天降たる 星の使ひのいらつめに 歌一くさり舞はしめて

波間の底にうたひ收めむ

銀河

「端より端に流るれば

みなもと知らぬ天の河

きらめく星は銀の

真砂とばかり見ゆる哉

銀河

「なにを疑ふ人間の

窺ひ難き境なし

神の業は隠れなく  
 夜の空にも輝けり  
 天女三河星の流はあざやかに  
 消えざる虹とかゝれるを  
 誰ろ近づくを憚かりて  
 いつまで人の遠ざかるらむ

ほころび

詩のわかれ道迷ひ來れば  
 姿若うて童に似る  
 黄昏鄙に汽車を待つは  
 今朝故山を出でし子なり

あわたししくも家を脱けて  
 古びなえたる春の衣料  
 身長合はぬを下に襲ね  
 着るとしもなく纏ひけるよ  
 行くや歸るやさしめき言

茶女笑ふはしたなきも  
我今夢の底に沈み  
聲より遠く遠く離る

覺めたる如く我に歸り  
物言ふ方に面向けぬ  
草の蔭なる少女なれば  
はぢらふ顔に潮みてり

くりかへし言ふ我春衣の  
裾のはころび少女なれば  
眼さどく告げて醒ましけんを

人は應へず詩にしひぬ

男の衣のはころびしを  
旅なればころ心づくれ  
少女針持つ手柔かに  
詩想ふ人の裾を縫はずや

閃

電

闇の夜に  
人わざの  
大自然  
競ひつゝ  
搾木して  
火を包む  
五かさね  
輝ける

光ひく  
上知らず  
降りよと  
滅び行く  
絞る智慧  
大地の上  
六かさねの  
樓臺なる

見よ馳る  
八千曳の  
銅の  
永遠に  
はてしなき  
はてしなき  
紫の  
迷る

車路を  
石を据え  
線引きて  
外れじと  
町つゝき  
人を乗す  
閃きや  
闇の空  
打つ波は  
此處に来む

石いしあれば  
人ひと歩あむ

碎くだかれて  
路ちみちに敷しく

風かぜは木きに  
静しずかある

收をさまりて  
明あ方を

轟とどろしく  
動うご揺めの

馳はせ去さるは  
始はなり

電でん光くわうの

あやどり  
を

こまぬき  
て

仰あぎ  
みる

工たくま  
しき

博は士せ等らは

行ゆく雲くもや

た  
くはへむ

河井醉茗著書

明治三十四年一月、内外出版協會出版

無 弦 弓

明治三十八年六月、金尾文淵堂出版

塔 影

明治三十八年六月、内外出版協會出版

青 海 波

明治三十九年五月、女子文壇社出版

玉 蟲

出版圖書目錄

東京市京橋區銀座三丁目

左久良書房

電話新橋三四〇番

馬場 上  
孤田 主  
蝶敏 幹  
君君

藝苑

實費金拾五錢 郵稅金壹錢  
明治三十一年一月創刊  
每月一回發行

伊藤 藤銀月  
主 幹

海國青年

實費金拾參錢 郵稅金壹錢  
明治三十一年九月創刊  
每月一回發行

島崎藤村君序 三宅克己君畫  
村山鳥逕君著 橋本邦助君畫  
小説 ささにごり  
製本費金五拾八錢 郵送費金六錢

故尾崎紅葉氏に學び、去つて敬虔なる牧師となれる著者、兩様の生涯に深く養ふところ、先づ現れてこの一篇となる。敢へて宗教小説と榜するは、沈痛の警聲、必ず人心の機微に徹底するあるを期すれば也。

磯水君著 狂書  
小杉未醒君著  
樂天 太郎冠者  
製本費金五拾五錢 郵送費金六錢

あいやお立合、狂言でお馴染の太郎冠者、此度御披露仕るは、延命長壽福徳の御守、數は十と八通りある、さあさあ御暇がなくとも試みて御覽じる、悪魔拂ひの本来本元はこれよりと御座い。

河井醉茗君選著 藝術の殿  
中澤弘光君裝畫  
詩集 桂の巻  
製本費金參拾貳錢 郵送費金四錢

桂の巻は、詩歌の光明にあこがるる五十九名の若人が、藝術の殿堂に高踏せむとする第一歩なり。氣運將さに一轉機を生ぜずむば止まざる現下の詩界に、このささやかなる巻の名をも傳へしめよ。

生田 葵君著 杉浦朝武君畫  
小説 富美子 中澤弘光君畫  
製本費金七拾五錢 郵送費金八錢

殿上、花は碎けぬ、仇し名の怨なるよ富美子姫、風を忌み霜を厭ふ圍守が情に懈りはなけれ、秋知りあへぬ昨日今日をいかむすべき、蘆湖畔の一夢さめ來りたるいま、姫が世の榮の春やいつの日なるらむ。(後篇豫備士官)

國小 木杉 田未 獨醒 步君 序著

畫集

### 漫畫一年

製本費金九拾五錢

郵送費金拾錢

天馬空を行くは未醒の給也、想の嶄新、筆の警拔、到底地上の物にあらず。漫畫一年成る、親朋相集りて辭を陳ぬる三百六十紙、

詩文執筆

沼波 有音 蒲原 明君 蘆見 水君 窪田 穂君 平塚 軒君 谷津 軒君

河井 醉若 吉江 孤雁 武島 雄君 小島 水君 樋口 天君 長谷川 子君

鹿島 櫻蒼 田岡 嶺雲 國本 獨歩 阪本 紅蓮 樋口 象洞 細川 花紅 川口 花紅 花紅 象洞 紅君

畫を見ずして、文は飄ち露夜の星、文を見ずして、畫は載ち秋郊の花。

遲塚麗水君著 齋藤松洲君裝畫 紀行文集

### ふところ硯

製本費金七拾九錢

郵送費金八錢

一个掌大の古端硯、筆を染めて書き綴りたる旅の記の、其の墨の香の源は、古場の花の涙、癡院の月の雫、鮫はしる溪の流、湧く玉のみたらしの泉、さては夜の泊の蓬の窓より掬ぶ江の、水いろいろ、心さまざま、いづれも是れ清趣横溢、

岩野泡鳴君著 小林千古君裝畫 一大奇論

### 神秘的半獸主義

製本費金六拾九錢

郵送費金八錢

現代の淺薄虛偽なる科學と宗教とを打破し、直に赤裸裸の眞生命を活躍すべく、「神秘的半獸主義」は其深なる悲觀の胸奥より生れたり。議するところ古今東西の哲人宗教家立論者に涉りて、エメルソン、メーテルリンク、ゾキテンホルグ、等より布行したる神秘的的人生觀、戀愛論、國家問題、新藝術論に及ぶ。自然哲學、空靈哲學、表象哲學と輾轉推移して、十有餘年漲溢し來れる著者が思潮は、今茲に一機迸發せり

岡鬼太郎君著 鑄木清方君畫 花柳小説

### 夜帯

製本費金四拾五錢

郵送費金四錢

篇を二六の晝夜に分ちて、筆は色界の明闇を寫す、詩的散文を以て、情的風俗史を彩るもの、時人克く誰か當らむ。淫風日日書架を吹く、麗書か。巻頭著者は敢へて喝す、何さ不見點の賣れる世だよと。

伊良子清白君著 長原止水君畫 詩集

### 雀船

製本費金七拾錢

郵送費金六錢

句句寶石の如く、節節彩翎の如く、長篇は白玉城廓の如く、短篇は爛星の如し。こは明治年間自然詩集の尤なるもの也。小島烏水君曰く、君が描ける自然には心血の色あり、君が語る人間には微妙の情火あり、平生の鈴鐺潜修を傾注して、此卷成ると。

明治三十九年度

### 太平洋畫會カタログ

製本費金壹圓 郵送費金四錢

挿畫 五十八圖  
畫家 四十六名  
皆是傑作優品

明治三十九年春季 太平洋畫會展覽會 紀念繪葉書

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

石川寅治君の歸來洗刀、大下藤次郎君の隅田川、河合新藏君の入江、鹿子木孟郎君摸寫アングルの源、小杉未醒君の捕虜と其兄、滿谷國四郎君の多摩の霜葉等、會場中の逸品を收めたり。



國木田獨步君著

小杉未醒君書  
滿谷國四郎君書

小説運

命

製本費金七拾五錢 郵送費金六錢

題已に痛絶、想豈に恨絶ならざらむや、一卷九篇の文、盡く人生の大秘奥を穿透し來りて、字字刀舞し、句句戟躍す、如是の小説は娛樂的産物に非ず。

馬場孤蝶君選  
齋藤松洲君書

詩集春

駒

製本費金參拾五錢 郵送費金四錢

現に睡る野を焼けば、胸の春駒戀を得て、わかき血汐に狂ふごと、燃えて騎れるかげろふや。白き鬣ふりみだし、西に勢へる駿足の、みるみる丘をのぼりては、凱歌あぐる焔かな。あらおもしろのがめよと、はらびひて吹く牧の子が、すさびの笛は草なれば、おのづからなる野の調。ほのはは高く天に和ぎ、笛の音清く地に流れ、情想融くなる春風の、また夢に入る紫野。

寫眞文學記者  
沙上寫隱著

寫眞小

影

製本費金貳拾八錢 郵送費金四錢

畫帖につつむ初戀を、君よ咎むな胸に咲き、胸に散りにし小さき花、その懐かしみ誰か知る。夜、手枕のひとり寐に、有情の夢のかたひや、曉、覺めてながめ入る、影は無心の笑まひかな。指優ふる二十年の、名残の色は艶なりき、今は昔の匂ひさへ、黄脂日にますうらぶれや。さばればほのめくなまめきの、眼ざしに盡きぬ生命あれ、卷の寫繪かずかずを、瓦とすてて玉と止めむ。

網島梁川君序  
齋藤弔花君著

小品心

扉録

製本費金參拾五錢 郵送費金四錢

君の文情は猶印象派の畫情の如き乎、必しも寫實の刻劃を藉らずして、而も景情一味、澹として人を酔はしむ、若しそれ小椿の蕾の、童の手に破りすてられたるを見ても、限なく心を傷ましめたる。さてはわが手飼の庭鳥を盗みたる小狐に、憤怒の銃先を向けぬがら、端なく其母仔嬉遊の状を見ては、徐かに銃を投げて彼等を平和を破らんとせる心遣ひの一ふしなど、吾人は讀みて何となくパルンス集中の情趣に邂逅せる心地す。網島梁川君、「心扉録」を讀むの一節

馬場孤蝶君選著  
一條成美君作畫

詩集花

がたみ

製本費金參拾四錢 郵送費金四錢

若き血汐のあふれては、詩にうつくしき花と咲き、その花びらのとりどりを、名もふさはしき『花がたみ』蒐むる花のかずかずは、羽袖も輕き佐保姫の、思ひにふれてにこやかに、薰るその香のなど清き。幸ある子等が一卷の、詩集の花の香に酔ひて、われと我が詩のうるはしく、清くゆかしく咲きなむを待つ。

著者細川花紅逸人  
附錄島崎藤村君  
口繪梶田半古君  
插畫中澤弘光君

小品茂

志保

製本費金六拾八錢 郵送費金八錢

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にさやけく、富士はますます照りわたりて、紫水晶の燦として夜目にもひかり輝くがごとし。蕭み薄の「世」、壓抑や、陷擠や、戕虐や、日夜心神を惱まして、この飄零の羸軀を責め、埋骨の地いま將たわがために寸土を割かずして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるきのふけふ、惱めるものは寧められ、苦めるものは慰められたり。『茂志保』京を去る文の一節

著者細川花紅逸人  
序文後藤宙外君  
附錄中村春雨君  
插畫一條成美君

小品う

ぶ聲

製本費金參拾九錢 郵送費金四錢

輻軻の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のただずまひ、白露附つる夕や、細雨粘する朝や、そこに惱みなきか、そこに煩ひなきか、秋閑けて萬山黄なるとき、冬深うして四境白きとき、そこに苦みなきか、そこに痛みなきか、飛花しづ心なく散り、落葉亂れて舞へるのりを、われはなほここに安意の地を得べきか。『うぶ聲』深山の湖水の一節

題序著表口寫附  
字文者紙繪眞錄  
尾巖細鏑鳥寫山  
崎谷川木居友岸  
紅小花清清會荷  
葉波紅方忠員葉

寫眞影

（三版）

製本費金九拾八錢  
郵送費金八錢

空よく霽れたり、上は小松の褐色染、下は青海波の襦袢様、鏡とまがふ渥美の入江に、うつりもやせむ黛の、紫立てるは三の山か、青う流るるは尾の峰か、口臍脂の紅、解けて漂ふと見えし、日を享けし旗雲の彼方、鐵漿墜せしは、篠、日間賀、佐久の島島、師崎はかすけく、立馬押はほのかに、神風ぞ吹く勢の國は、淡靄一抹、遠く大わだつみの外に立ち籠めたり。『影』照潮記、伊良湖の一節

一册金拾貳錢  
郵稅金四錢

明治三十九年十一月十六日印刷  
明治三十九年十一月廿三日發行

編輯者兼  
行纂者

東京府荏原郡品川町利田新地六番地  
戶田直秀

發行所

東京市京橋區銀座三丁目  
左久良書房  
電話新橋三四〇番

印刷所  
印刷者

東京市京橋區南紺屋町二十四番地  
岡田活版所  
東京市京橋區南紺屋町二十四番地  
岡田鍊一

